

第5章 賃金と物価

司会…ウエストンへの反論もいよいよ

今回の第5章で最後です。レポートは前号の第3章、第4章を受け持った高知県協報話友の会の池内康宏さんです。よろしくお願ひします。

高価な労働は

安価な商品を生産する

「諸商品の価格は賃金によって決定または規制される」ウエストンの主張はこのただ一つのドグマ（独断論）に帰着しますが、状況を観察すれば、その考え方が独善的であることが明らか

です。

坑夫、造船工などは、彼らの生産物が安いため他のすべての国民との競争に勝っていますが、賃金が比較的安い農業労働者は生産物が高いためほとんど他の国民との競争にも敗れています。一般的に高価な労働は安価な商品を生産し、安価な労働は高価な商品を生産することが現状です。つまり諸商品の価格は労働の価格によって支配されていないという証拠なのです。

賃金が価格を

規制するというドグマ

またウエストンは、労働者の賃金だけでなく、利潤や地代も諸商品の構成部分をなすと言っています。つまり諸商品の価格は労働者賃金+資本家の歩合+地主の歩合ということなのでしようか。仮にこれらが1…1…1であるとして、賃金が増えればそれと相対して上がるのでしょうか。賃金が価格を規制するなどというドグマを唱えるすべての老朽経済学著述家たちは、利潤や地代を賃金に対する単なる追加的歩



合として取り扱うことによつてこれを証明しようとした。しかし彼らは科学者らしくない伝統・慣習・資本家

19世紀炭鉱労働者

の意思等々、およそ恣意的で説明できない方法に逃げ、誰一人として歩合の限界を何らかの経済法則から説明することはなかったのです。例え彼らが、利潤は資本家間の競争によつて決定されると言つたとしても何の説明にもなりません。競争は種々の事業における種々の利潤率を平均化しますが、一般の利潤率を決定することはできません。

価値は価値によつて決定されるのか

では諸商品の価格は賃金によつて決定されるとはどんな意味なのでしょう。賃金は労働（労働力）の価格であるということ、諸商品の価格は労働（労働力）の価格によつて規制されます。価格は交換価値のことであり貨幣で表現されます。つまり、「諸商品の価値は労働（労働力）の価値によつて決定される」、または「労働（労働力）の価値は価値の一般的尺度であ

る」ということです。では、「労働（労働力）の価値」はどのようにして決定されるのでしょうか。かくして、労働（労働力）の価値は諸商品の価値を決定するという主張から始まって、諸商品の価値は労働の価値を決定するという主張で終わる。それでは「価値は価値によつて決定される」という循環論に陥つて、それだけでは本質には至っていないということになります。

資本家の言い分に負けるな

司会：では池内さんこの章でマルクスは何を言いたかったのか、概要を改めて教えてください。

池内：前号でも言いましたが、ウエストンは一貫して賃金の高騰（賃上げ）は価格に反映されるので意味がないと主張しています。さらに価格には労働者の賃金、資本家の取り分と地主の取り分が含まれるともいっています。マ

ルクスはこれを1・1・1と仮定し、

1つ（賃金）が増えれば他の2つ（資本家の取り分と地主の取り分）も同様に増える。しかしそれらについては何ら科学的な根拠がなく恣意的なものであるとしました。諸商品の価格は賃金によって決定され、諸商品の価値は労働（労働力）の価値によって決定されるが、労働（労働力）の価値は価値の一般的尺度であり、結局価値は価値によつて決定されるとなり、意味がわからないことになってしまいます。現在も賃上げすれば物価が上がるということとはよく言われますが、それで納得させられていたら、労働者階級の解放や地位向上にはつながらないということを書いておきます。

司会…高い賃金労働者が安い商品をつくったり、低い賃金労働者が高い商品をつくつたりの事実があり、賃金の額の高い低いによって単純に商品の価格がそのまま決まるわけではないという

ことが前半でわかりますね。

HG…第二章でもイギリスとアメリカの農業の例を出して述べられていましたよね。イギリスはアメリカより農産物の価格は高いが、労働者の賃金はイギリスよりアメリカの方が2倍以上高いという実態があり、単純に賃金が高いからといって生産物価格が高くなるということとは事実を見て明らかだとなっていました。ここではそのことも含めて繰り返し事実からしてもウェストンの誤りを指摘したということです。

柳本…そこがなぜかということですが、これは少し先の章からの先取りになるのですが、簡単に言うの高い賃金ということはいわゆる大企業で、新しい機械を導入して生産性を高めることができます。大量生産することによつて一つ一つの商品の価値は小さくなり、価格も安くなります。逆に低賃金労働者の中小企業は生産性を上げることができず、大量に短時間で生産ができない

ため、どうしても商品コストが高くなります。つまり単純に賃金が物価を決めるという論理は破綻しているのです。

資本家の取り分を含めた

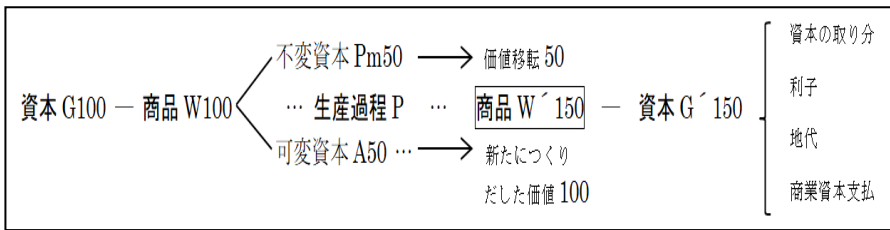
価格設定か

司会…次に利潤と地代のところですか。

労働者の賃金と自分の取り分と、地代等を支払う部分、これらを含んだ価格にしたいというのが一般的ではないですか。

AD…一般的に商売をしようと思ったときには、元手の部分を取り返さないといけないので、全部含んだの価格を設定したいですよ。

KH…以前に行った、古典学習会なかで、地代と利子を資本家が支払うところと疑問が出ました。その時は土地については自然のもので唯一無二なものであるし、利子も労働者が作り出したものでもなく、その基準に合



わないからというようなことでその場は解決したことがありました。未だに明確な答えが出ていません。

須藤…簡単に説明すると、資本家が物を生産する際に資本を投入します。この資本は不変資本（工場や生産機械や原料）と可変資本（労働者＝賃金）に分かれています。それぞれ50ずつ投入するとします。この資本を用いて生産し、新しい生産物である150の商品ができました。それを販売してはじめて価値が実現します。この150のうち、50が剰余価値です。この剰余価値を全て資本家が取ってしまうのではなく、そのなかから、生産の為に銀行でお金を借りている場合はその利子も含めて、また土地代も地主に借地料を支払わなくてはならず、それを除いた部分が資本家の取り分となります。

土地代の問題

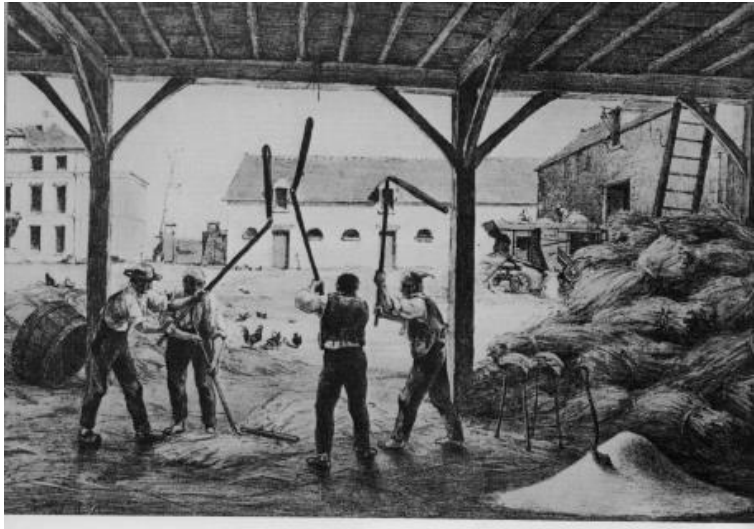
HG…土地代も最初の不变資本に入れることはできないのでしょうか？

司会…一部は含まれているのではないのでしょうか。

KH…最初の不变資本に土地代も一部含まれているのであれば、新たに生まれた剰余価値のなかで、再度支払わなければならない理由がわかりません。

明確に資本家の取り分は算出できないということにもなります。労働者の労働によって生まれた新たな価値のなかから地代に出すというところが理解できないのですが、助言者教えてください。

須藤…最初の不变資本と可変資本の100は一度全て消費します。不变資本（50）の価値は新商品に価値移転します。可変資本（労働力50）は消費されることによって、新たに100の価値を生み出すのです。剰余価値は



意しておくもので、不変資本の方に入ってくるのではないかと思うのですが、どうなのでしょう。か。

柳本…資本家も土地代等を複数年かけて、生産を繰り返しながらその都度支払いをしていくのです。もちろん借地ではなく土地を買って用意した場合は最初の不変資本に含まれることとなります。こういうようにマルクスは主張をしています。

HG…当初は土地から何から何までも、まずお金が必要なので、投資はしているはずですが、なので、一番最初の生産時には不変資本のところの一部地代とかが含まれてくると思います。そして次からは生産して生まれた新しい価値のなかからそれを出していく。その繰り返しのことで

すか。

YM…最初からそうではないのではありませんか。土地も例えば1年契約で、1年間生産してそのなかから土地代を支払っていくというように。

HG…最初も工場は建てるとし、土地も必要になるのではないですか。

須藤…私有地の土地利用は生産手段の一部ですが、借地利用は地代として剰余価値から支払われます。「地代論」は大変むつかしく「地代論争」もあり、疑問は良いことと思います。研究していただけたらと思います。

IU…HGさんが言ったように、最初も土地の借地料は出てくるでしょうね。1年間資本を動かして、出た利潤から次の年の借地料を支払っていくという感じかと思えます。

HG…利潤が出たという前提で話していますが、うまくいっている時は問題ないのですが、事業がうまくいかない場合もあるわけで、そうなると後払い

50ですからそのなかから資本家は少しづつ利子や地代を払うのです。

TG…借地料などは通常あらかじめ用

◆特集 みんなの学習講座

は土地やお金を貸す方もリスクが高いので、一般的に考えれば、不変資本なりにその部分も入れて生産し、価格を決めていきたいと思うのが通常ではないでしょうか。

司会…先ほどKHさんの古典学習会で出された疑問がまさにこれですね。利子や地代をはじめから資本家が支払わなければならず、価格に転嫁できないというところ。不変資本に最初から入っておけば、価格に反映できることになるので。これは研究が必要ですね。

固定資本と流動資本

柳本…生産手段のなかには固定資本と流動資本というものがあります。例えば数年維持ができる工場・機械などが固定資本、対して一方1回の生産で消費する原材料などが流動資本です。そして労働者の賃金も流動資本です。不変資本のなかにはこの2つが含まれて

いるのです。流動資本は先ほど言ったように1回の生産で消費して商品に価値が移転していきます。固定資本は何回も繰り返し生産するなかで少しずつ消費して商品に価値が転化していくものになります。

KH…工場は数年かけて転化していくのはわかります。減価償却という考え方で理解しています。地代や利子は価値に転化できないと理解しているのですが、どうでしょうか。

須藤…不変資本(固定資本)は数年ごと更新していかないといけないので、剰余価値のなかからすぐさま補填するのではなくても、更新時に必要となる蓄えとしての側面もあり、減価償却費として剰余価値のなかに入ってきます。土地も資本家の持ち物でなければ地代として支払いをしていくことになりません。地代からは価値は生まれえないことなんです。

労働者が価値を生み出す

AD…不変資本のなかに一部地代が含まれるのであれば、少なからず価値を生み出すということですか。

柳本…地代の部分の価値はそのまま移転するだけで、価値は生みません。価値を生むのは労働だけです。

司会…資本家が原材料等を買って、労働者を雇って生産し、新たな価値のついた商品を生み出す。ここまでは大丈夫ですね。あとは生産により生まれた剰余価値が何に使われるのが問題になっています。また特にこの章ではウエストンへの反論について、「諸商品の価格は労働の価格によって支配されていない」ということを重々理解する必要があります。この後の章でも価値とは何かというところは出てきますので、次からの学習と議論に譲っていきたいと思います。